

平成20年度第1回千葉市史編纂会議議事録

- 1 日 時：平成20年5月22日（木） 午後1時30分～3時30分
- 2 場 所：郷土博物館 講座室
- 3 出席者：（委員）
吉田会長、野村副会長、今井委員、白井委員、本郷委員、安田委員
（関係者）
千葉市史編集委員会 三浦委員長
（事務局）
河野生涯学習部長、本庄生涯学習部参事兼課長、倉田生涯学習振興課主幹、
丸井郷土博物館館長、殿塚同館副館長、若菜同館学芸係長、
築瀬同館副主査、（市史嘱託職員（大関、彦坂））
- 4 議 題
 - （1）平成20年度事業予定について
 - （2）今後の事業予定について
 - （3）その他
- 5 議事の概要
 - （1）平成20年度事業予定について
事業予定について承認された。
 - （2）今後の事業予定について
主に『歴史読本』の企画、及び『千葉市史 史料編 近現代』等の編成案について意見を出し合い、引き続き検討していくこととなった。
 - （3）その他
編纂会議の年間開催回数、時期について検討していくこととなった。
- 6 会議経過

午後1時30分、委員6名全員出席（三浦委員長は途中参加）
司会（若菜係長）より、配付資料について報告し、続いて設置要綱第5条第2項の規定により、この会議が成立していることが告げられ開会。
吉田会長と河野生涯学習部長の挨拶に続いて、本庄参事兼課長が職員の紹介を行い、議事に入った。

議題1 平成20年度事業予定について
平成20年度の市史編纂関係の事業予定について、史料調査収集・整理事業、市史等の刊行事業、編纂普及事業、市史研究事業、市史協力員の活動、その他の活動の六つに分けて担当より報告を行った。

< 質疑応答 >

吉田会長：今回は随分多岐に亘っているが、事業予定についての実質的な議論が若干でも出来るのは今回が初めてなので、何か意見を。

近現代編の史料調査収集については、近現代編編纂に伴う事業予算の枠で行われるという事なのか。

事務局（築瀬）：アルバイトを使って作業しているので、実質的にそうなる。

吉田会長：収蔵庫のスペースの問題はどうか。殆どないとの事だったが。

事務局（築瀬）：現在整理を行っている大堀家文書を収蔵するとなると厳しいが、収蔵庫内を整理して遣り繰りする予定。

吉田会長：詰めこむという事か。資料収蔵スペースの問題については、どういう展望があるのか。

事務局（丸井館長）：現状では収蔵資料が通路に溢れている状況なので、収蔵スペースを確保しなければならないが、目処はついていない。何らかの形で、もう少し内部を整理して、少しでも収蔵出来るようにしていくしかない。

吉田会長：河野生涯学習部長は収蔵庫を見学されているのか。まだ見ていないのなら、ぜひ市民の生涯学習の財産が、どんなに酷い状況で収蔵されているのか見て頂きたい。

白井委員：統廃合される小中学校の空き教室を活用出来ないか。

事務局（丸井館長）：学校は窓が多く、資料の安全管理が難しい。統廃合された空き教室については、出版物の在庫の倉庫等に重宝してはいるが、現状では収蔵庫に相当する施設は確保出来ていない。

今井委員：例えば生浜町役場文書のように、現物が当館にあって、現地にはコピーが展示されているような史料もある。従来は現地に保管スペースが無く、廃棄されるという事で、当館に集約して持ってきていたが、逆に現地に保管スペースがあれば、現地保存主義で分散収蔵にしても良いのではないか。市内の旧家でも蔵を改造して自宅保管にしている例もある。分散してもこちらでケアすればよいのではないか。

吉田会長：市の地域文化財に登録申請されるという平川町内会文書については当館にあるのだろうが、平川町の会館には収蔵スペースはないのか。

今井委員：会館で保管出来るようであれば、それでも良いのではないか。

吉田会長：旧家の土蔵を活用するとか。

事務局（本庄課長）：現時点では具体的な計画等がある訳ではないが、今後当館脇の駐車場スペースの活用等も含めて、他部署と協力しながら収蔵スペースの確保も視野に入れて、考えていきたいと思っている。

吉田会長：それは博物館全体としての色々な収蔵スペースとしてか。

事務局（本庄課長）：多方面で活用出来るものが一番望ましいが、今後検討していきたい。

吉田会長：空き教室等では、いわゆる古文書類は心配があるが。

事務局（丸井館長）：そのままでは使えないので、防火・防虫等のために出来れば空

調や湿度調整の整備は考えたい。現状は館内の収蔵庫の整理と、駐車場スペースの今後の活用、現地保存管理といった面から検討していきたいと思う。

吉田会長：近現代史の聞き取り調査というのは、近現代の史料編纂の資料収集の一環という事だと思うが、そこで収集した録音データやテープ起こしされた原稿は重要な歴史資料になっていくと思う。そうした資料の保存管理や公開については、どのように考えて作業しているのか。

事務局（丸井館長）：現状では、前回の千葉大学との共同研究のような報告書の形式は考えていないが、『千葉いまむかし』に成果は掲載している。また、ミニ展示の形で公開する事も検討している。

吉田会長：『千葉いまむかし』の原稿の締切と刊行はいつか。

事務局（築瀬）：少し早いが8月末締切で、3月末刊行となっている。

野村副会長：『千葉いまむかし』のPDF化は、これまで主張してきた事なので良い事だ。デジタル化の推進ともあるが、これまで刊行してきた膨大な数の『千葉市史 史料編』のPDF化についても考えているのか。

事務局（築瀬）：これについても考えている。

野村副会長：ぜひお願いしたい。やはり厚い本で持ち運びに不便なので、PDFの方が検索し易い。収蔵庫の問題からも郷土資料は出来る限りPDF化して欲しい。

吉田会長：PDF化はお金掛かるのか。

事務局（築瀬）：自前でやればほとんど掛からない。

野村副会長：写真で撮るようなものだ。しかし、索引を作るとお金が掛かる。それと寄贈図書については、どこが窓口になっているのか。

事務局（丸井館長）：館に送られてきたものを寄贈者の種類で分けている。館と市史の両方に来る場合もある。

野村副会長：一般的に出版された書物は国会図書館に必ず寄附するルールになっているが、歴史に関する図書については、市の図書館ではなく、ここで受け入れているのか。

事務局（丸井館長）：この場合の寄贈図書は、館や市史から発行した書物との交換で送られて来るものが大部分。

野村副会長：市民が作った郷土にかかわる本は、小さくとも意義のあるものなので、広報誌でもPRして寄贈してもらえるようにした方が良い。いずれ貴重な資料になると思う。

事務局（丸井館長）：市内の刊行物等については、なるべく収集に努めている。そうした資料の整理・活用についても検討したい。

吉田会長：『千葉いまむかし』の編集内容について、史料紹介の内容はどうか。

事務局（大関）：まだ確定ではないが、日暮家文書内の安政年間のコレラの話について、他史料と絡めて紹介できればと考えている。

吉田会長：紙上古文書講座との連動は出来ないか。

事務局（大関）：そう出来れば一番良いが、紙上古文書講座の方は結構易しい文書を使用しているので、文字の解読等に問題がある。

吉田会長：あえて言えば中世や近世の論文も欲しい処だ。丸井館長も書いてみてはど

うか。

野村副会長：近現代が入って良くはなった。原稿が足りなければ、千葉大学との聞き取り調査の資料を一般市民向けに活用してみるのも良いのではないか。

吉田会長：編纂普及事業等についてはどうか。これまでも研究講座の内容や古文書講座の実施の仕方の見直しを提案してきたが、持ち越しになっていた。個人的には出来れば来年度以降については、少し編纂会議で議論し、編集会議の委員方にも協力頂いて、講座関係の企画を整理して、より良くしていきたいと考えているがどうか。

白井委員：今年度から研究講座を前期後期の2回に分けるとの事だが、市政だよりにはどのように掲載していくのか。

事務局（築瀬）：市政だよりには最低限の情報しか載せてもらえないので、前期の簡単な内容くらいしか載らない。

白井委員：2回に分けるという事も載せられないのか。

事務局（築瀬）：前期の募集だけしか載っていない。

白井委員：この研究講座にも開拓団の聞き取りの報告を入れる予定はないのか。市史研究会では一度行っているが、一般市民で研究講座に来てくれている人達は年配者が多いので、開拓団の聞き取りも関心があるのではないか。

事務局（築瀬）：その辺りも検討してみたいと思う。

吉田会長：聞き取りだけをテーマにした講座はどうか。聞き取り分野が専門の先生を呼んで、参加者が聞き手にもなり話者にもなるような勉強会のようなものもありなのではないか。また、築瀬副主査が今度行う研究講座の内容を文章化して『千葉いまむかし』に掲載してみるというのはいかがでしょうか。

事務局（築瀬）：以前、『千葉いまむかし』に書いてしまっているので、内容的に重複してしまう。

本郷委員：研究講座や聞き取りと、『千葉いまむかし』が有機的に結びついて、話した事が文章化され掲載されるなどして、内容にバラエティーがあるようになれば良いと思う。

吉田会長：天下井先生の講座内容は、どこかに書いているのか。

事務局（築瀬）：前任担当者の決定だったので、詳しくは分からない。

吉田会長：論文でなくても講演録のような形で良いのではないか。

本郷委員：折角だから何か形が残るようにすると良い。

事務局（築瀬）：今回の21号では鈴木先生の講演録を掲載している。

野村副会長：年2回発行予定のニューズレターは、今回初めての事業だが、配布先はどこになるのか。また、折角のカラーなのだから講座内容や史料紹介だけでは無く、市民向けの広報として市の文化財行政・市史に取り組む姿勢がハッキリ示されるのだから、力を入れて良い物にしてもらいたい。市史編纂の意欲が紙面に溢れるような内容を期待している。具体的な案についてはこれからだろうが、配布先によっては、かなり柔らかい内容にもなると思うが、その辺はどうか。

事務局（築瀬）：配布先については市内の学校・公民館といった公共施設、市史に協力して頂いている関係者、また館内にも来館者向けに常備する予定。またホーム

ページの中でも、PDFで誰でも見られるようにしておきたいと考えている。

野村副会長：やはりニューズレターを出す目的をしっかりと捉えた上で、レターによって何を期待出来るかが表れる良い企画を組んでもらいたい。

吉田会長：既に博物館のホームページは開かれていると思うが、市史編纂室の活動についても載っているのか。見た事はないがアドレスは。

事務局（丸井館長）：ある程度の事は載っている。アドレスは後で連絡する。

事務局（築瀬）：講座の案内等が中心になっているが、ホームページ上でも市史の活動内容を増やす事も必要だと考えている。

事務局（丸井館長）：年に2回のニューズレターの大きな意義は、市史編纂の作業状況を逐一報告していく事である。そういった事を主眼として、もう少し細かい内容についても考えながら、様子を見ながら進めていきたいと思っている。案が出来たら、また検討をお願いしたい。

野村副会長：市史の資料収集・保護活動の重要性や意欲が紙面に表れると良い。

事務局（丸井館長）：市史の活動、特に資料収集の状況は、なかなか目に見えないものであるから、そうした事を広く知らせる事で、また資料収集の範囲が広がればと考えている。案が決まれば、また審議をお願いしたい。

吉田会長：ミニ展示は画期的だと思うが、博物館の事業活動とのリンクなのか。本来のあり方としてはどうか。

事務局（丸井館長）：元々市史編纂は館の学芸係に含まれる事業であり、これまでも若干の資料を展示した事もあるが、ここでは今回市史編纂の過程で得られた情報や資料を、2階の展示場の中で現在「大賀ハス」の展示が行われているコーナーを活用して、多くはないが下志津軍用地の資料と戦後開拓団の聞き取り成果を併せて展示出来ればと考えている。まだ具体的に進んではいないが、千葉市の戦後史の中で余り取り上げられてこなかった戦後開拓について何らかの形で表現出来ればと企画している。

吉田会長：基礎的な研究やデータはあるとして、この場合の展示に必要なシナリオ作りとか、どうレイアウトするかは丸井館長の方が専門ではないか。

事務局（丸井館長）：企画自体は館全体で取り扱い、展示専門の学芸係とも相談の上で見やすく、アピール出来る展示を考えている。

吉田会長：基本的な枠組みとしては博物館の小企画展という事か。

事務局（丸井館長）：市史編纂の過程の中で出てきた情報を、博物館の展示場の中で展示する形となる。今までそうした市史編纂の過程を展示する機会は無かったので、今後は市史の古文書等も上手く展示していく方法も考えている。こうしたミニ展示でも会議の方からの意見があればお願いしたい。

吉田会長：基本的には非常に積極的で良いと思うが、市史の担当者にとっては新しい仕事の分野で、場合によってはオーバーワークになるのではないかと。そういう面での人材の確保や予算的な措置が生じる場合もあると思われるし、それを市史編纂活動の一部として、ある程度の枠が保障されるとイメージして良いのか。あるいは、現状の博物館の特別展等の事業活動の枠の中で処理されるような、部分的に市史編纂担当の職員が協力、あるいは委託を受ける形になるのか。

事務局（丸井館長）：まだ厳密に考えている訳ではないが、市史編纂の過程で得られた収集資料を上手く展示で生かす形で進めたい。展示も広い意味での市史編纂活動・表現の一つであり、担当者がオーバーワークにならないように十分考慮したいと思う。こうした事を積極的に行う事で、ニュースレターといった文章的情報と展示という形で市史の活動を表現していきたい。

吉田会長：次の市史研究事業についてだが、以前、編纂活動について色々提案した中に、共同研究という枠を市史の研究事業の中で少しずつでも進めてはどうかというのがあった。私の具体的な案は三つある。一つ目は、今日行われる市史研究会のように、千葉市の中の小さな地域の中で、その地域に則した歴史について、地域の活動を通して叙述していくこと。二つ目は、私の科研費と絡められるが、薪炭などの流通からみた千葉と江戸（大都市）との関係について。三つ目は、近現代史の編纂という面だけではなく聞き取り調査を、市役所のOBとか、全くアトラダムに高齢者から行って、そのデータをストックしておく活動も大事である。そういった事業を増やす事によって、なるべく市に金銭的負担のかからない形で、市史編纂活動や博物館事業ともリンクさせられるような取り組みも市史の研究事業の柱として立てられるのではないかと。

事務局（丸井館長）：一番目と三番目の提案については、現在の市史編纂活動の中でも可能だし、実施もしている。今後は新たな方向を見出しながら進めていけると思う。しかし、二番目の千葉と江戸との関係といった研究になると、かなり本格的な研究会のような組織が必要になると思われる。以前、千葉大学と共同で行った聞き取り調査のように、大学との連携事業としてであれば研究はある程度進められる可能性はあるので、10月検討の政策調整事業の中で提案する事は出来ると思う。

吉田会長：それは誰と誰の連携として行われたものか。

事務局（丸井館長）：大学との連携については、千葉市と千葉市内の大学との共同研究として行われている。政策調整課が具体的に契約を行うが、それぞれの部門ごとに大まかな見積りや仕様を作って提案し、それを各大学側で検討して貰って、受けた大学と千葉市側とが共同研究会を組織して研究し、報告書を出すという形になっている。

吉田会長：研究費は千葉市から出るのか。

事務局（丸井館長）：共同研究を行う大学の方に千葉市から研究費を出す形になる。資料収集等の研究活動を行って、最終的には研究報告書を出して貰うように進めていく。近世の千葉市域と江戸との交流については、まだ調査の進んでいない分野なので、千葉側の資料を含めながら調査研究を行い、一定の成果を挙げられれば、千葉市にとっても非常に有意義だと思う。

吉田会長：博物館や市史編纂の予算の枠とは違うという事が。

事務局（丸井館長）：この事業は、博物館全体の事業となる。

安田委員：予算としてはそうだが、市の全体として位置付けという事だろう。連携事業という事であれば、行政としても予算が取り易くなっている。前回の聞き取りも千葉市が予算を出し、千葉大学が人手を出して行っている。こうした共同研究

は面白いが、折角行ったのだから、もっと活用して貰いたい。

事務局（丸井館長）：聞き取り調査については今回は限定的なものであったが、成果としては良い結果が得られたものと思う。

野村副会長：『千葉いまむかし』に連載するとか、そういう形で活かす方法はあると思う。

安田委員：話が大きくなるが、編纂の基本的方針として、単なる狭い文化事業としての編纂事業として無く、市民のアイデンティティーを作る柱の一つとして、市史編纂活動を結び付けていかなければならないのではないかと。今年の事業予定ではニューズレターやミニ展示といった意欲的な新しい動きもあり、また市史協力員（ボランティア）といった活動の場も出来つつあって、新しい展開をしていく可能性は見られるが、それらをどのように理屈付けしていくのかを、もう少し練った方が良いのではないかと。大学との共同研究事業のように、市の行政の新たな有り様を模索していく中で、市史編纂も新しい有り様で関わらせていく事を考えていかなければ、予算獲得の面等でも難しくなるのではないかと。その点でも、千葉市史なのだから、千葉市の成立以降、その後の発展を一つの柱として、現在の市民自身が千葉市の存在意義を受け止め直す、そのスタートとして近現代以前も含めて、市民が自らの市民生活を豊かにする為に過去を振り返る出発点となるような形での組み方を考えていかなければならない。開拓の聞き取りや戦後の聞き取りは、正にそうした現在千葉市に暮らす住人自身が、自分達の生活の成り立ちを振り返るスタートとしての意味合いがあり、そういう組み方をより考える事が重要だろう。収蔵庫の問題も、位置付けとして市の行政文書保存問題として考えるべきものであり、本気で新旧の行政文書を情報公開に対応していけるように残していくつもりであるなら、収蔵庫問題は単に博物館だけの問題ではなく、どうしても長期的に保存が必要な文書については、博物館や市史が責任を持って、長期的な事業の中で市史編纂が中核的な役割を担うという位置付けを行う事によって、市の各課への市史編纂に必要な文書の提供・要請等と併せて、新たな収蔵庫の確保等も打ち出していく必要がある。また、議題2の『千葉市史史料編 近現代編』の編成にも関わるが、戦後60年経って、戦後の千葉市が政令指定都市に至るまでの発展をしてきた中で、今後の住民生活をどう作っていったら良いのか、そうした事を中核に据えて全体編成を考えるべきではないのか。その為に必要な資料を、古代から現代まで全て収集・保存していく形での編纂のあり方、事業を中長期的に打ち出して行く事を考える必要があると思われる。

吉田会長：今の問題は議題2にも関わる事であり、時間的な事もあるので、次に議題2に移る。

議題2 今後の事業予定について

今後の刊行が計画されている『歴史読本』・『千葉市史史料編 近現代編』・『千葉市史料（仮称）』等について、その概要を担当より説明した。

< 質疑応答 >

吉田会長：刊行物を主とした予定の報告だが、『千葉市史史料編 近現代編』の4巻編成の再考を、ここで議論すべきか。

安田委員：最終的には編集委員会に任せた方が良いと思うが、市民の為の市史であるのなら、現在生きている住民達の関心にどのように対応していくかを基軸に編成していかなければならないと思う。まだ資料収集の段階なのだから、市民にとって同時代の歴史の部分が薄い通史的な時代区分では無く、例えば戦後の千葉市が政令指定都市に至るまでの過程、住民の活動を軸に近現代を考えてみると、かなり編成は変わってくるのではないか。

吉田会長：再考を要するという意見が編纂会議で強く出たということ、編集委員会へ伝えていただきたい。三浦委員長のご意見は。

三浦委員長：分量も増えるという事になるが、編成については、かなり昔に決めた事なので、現在の編集委員会としても検討してみたいと思う。

吉田会長：編集委員会は年に一回ぐらいとして、近現代史部会はもっと頻繁に開催されているのか。

三浦委員長：余り頻繁とは言えない。

事務局（丸井館長）：具体的な流れとしては、部会で検討した案件を編集委員会に提案し、更に編纂会議で再検討して頂く流れとなっている。もう少し部会の回数を多くして、十分討論した上で編集委員会、編纂会議に提案する事は可能であり、その点は事務局としても検討したいと思う。

吉田会長：4巻編成の各分野の執筆担当者も決定しているし、刊行年度についても決まっているようだが、これ自体はまだ流動的と考えて良いのか。暫定的な決定事項なのか。

事務局（丸井館長）：刊行計画については、基本的にまだ具体化していない段階であったので、暫定的に部会や編集委員会で試案を考え、大枠として4巻構成の中で各分野の割り振りを行っていた。現実的には、まだまだ十分な活動の出来る状況ではないので、メドとしては少なくとも年度内にはある程度の刊行内容の決定まで進めないと、計画している資料収集の段階までいかないのでは、その辺りの議論を進めて頂きたいと思っている。

吉田会長：しかし近現代の史料編は、この刊行計画に基づいて既に予算措置が取られているようだが。

事務局（丸井館長）：基本的には2年間、新聞資料等の基礎資料収集に予算を充てている。今後は、もう少し編纂内容に基づいた資料の洗い出しを行う等、改めて状況を確認しながら進めていきたいと思っている。

野村副会長：『歴史読本』の4分冊も決定事項なのか。

吉田会長：前回の2月時点では、今度の5ヵ年計画では無理だとの事だったが。

野村副会長：平成22年に完成となっているが、あと2年で4冊構成で読み易い『歴史読本』が全て出せるのか。せめて薄い本1冊が出れば良いのではないかとと思う。千葉市の人口の中で近現代史は、多数を占めている新住民も興味があると思うが、ブックレット形式としても4分冊では厚すぎるし、1冊の『歴史読本』で

良いのではないか。

吉田会長：『歴史読本』についての事実確認をしておきたい。前の編集委員会の議案と議事録では『歴史読本』については詳細な内容になっていたと思う。しかし、これは編纂会議では見た事が無く、5ヵ年計画では凍結・再検討として準備だけは進める事になっていたようだが。

事務局（丸井館長）：今回は『歴史読本』刊行に向けての事務局案として提出したものである。まだ具体的なものでは無く、意見を出して頂ければ、その提案を改めて編集委員会で検討していきたいが、予算要求の関係もあるので、まずはどのような『歴史読本』を作るのかについての意見を頂きたい。

野村副会長：やはり22年度の刊行は難しいのではないか。

事務局（丸井館長）：あくまでも刊行計画の中で、なるべく早い時期にと考えて提案している内容なので、決定という訳ではない。これから編集委員会で検討を行う為に、編纂会議でも議論し提案を頂きたいと思っている。

吉田会長：『歴史読本』問題については事実関係を再確認してみたいと思うが、次の編集委員会はいつ頃行うのか。

事務局（丸井館長）：予定は決まっていないが、早い時期に開催したいと考えている。

吉田会長：率直に言って、編纂会議は何をしたら良いのか分からない。編纂会議は千葉市の附属機関であり、執行機関である事務局に専門知識に基づく助言・提言、民意の反映に基づく参考意見を述べるのが役割で、様々な事を具体的に行う実行機関とは異なるとの事であった。つまり、千葉市の定義では実行機関は編集委員会であるとの事で、そういった面での編纂会議での実行的提言は採用されない。また、編集委員会が市史編纂の中で大きな権限を持っているが、市史編纂事業の中の編集以外の歴史講座や古文書講座、研究事業といった部分が編集委員会の管轄から外れてしまっていて、これらの所轄は事務局に一任されている状況である。しかし、市史編纂事業は刊行物編集だけでは無く、多岐に渡っているにもかかわらず、実行機関としてそれらを所轄・運営して、事務局と共同していく部分が欠けている。そうした編纂以外の事業も編纂会議が、実行的組織として機能した方が良いと思っていたが、附属機関としてのみだとすると何をすべきなのか不明だ。

事務局（丸井館長）：編纂会議は市史全体についての意見を提言して貰うのが役割であり、例えば刊行物については編集委員会で試案を作り、内容については部会で叩き台を作り、編纂会議に提案をして貰って、具体的に実現化するというシステムである。また、教育普及活動としての研究会や講座については、編纂会議で提案された内容を事務局が実施している。

吉田会長：提案して実施するのは実行委員会が行う事ではないのか。

事務局（丸井館長）：今回の会議の提案についても、事務局で実施する形で進める。

吉田会長：編纂事業全体を実行的に見る委員会が本来あるべきなのに千葉市には存在していないし、編纂会議はそれを代行出来ない。編纂会議・編集委員会から何人か出て、全体をカバーするような非公式の運営委員会が必要なのではないか。

野村副会長：市史編纂会議の審議事項を再確認した方が良い。

安田委員：市史の編纂は単に刊行物を出せば良いというものではなく、資料を集めて、それを普及し、市民自身が地域の歴史を学んでいくという事自体が、住民生活や行政の重要な柱としての位置付けとなる形にしていかなければならず、そうなるように市役所全体としても理解して貰えるように計画を行う必要がある。編纂会議は単なる諮問機関ではないと思うが、提言した内容・結果が具体的に報告されないのが問題だと思う。市史編纂の行政の中での位置付けについては、刊行物の発行だけではないという事を幾つか提言してきているが、反応がないのも問題だ。

吉田会長：編集については構造的に受け皿があって資料が来るが、それ以外の事業分野については事務局との相対でしかない。以上で議題2を終了するが、次に議題3に移る。

議題3 その他

次回の第2回編纂会議の日程として、年明けから2月上旬を予定していることを説明した。

吉田会長：それでは少ない。年度当初に1回、予算編成の前に1回、可能であれば年度末に1回で、最低3回は行うべきだ。2回であれば秋に開催した方が良い。予算の問題はあると思うが工夫して欲しい。

事務局（丸井館長）：その辺りは検討したいと思う。

野村副会長：『歴史読本』がこのスケジュールであるなら、今年の夏に予算要求をしなければならぬ時期だろう。本来なら、それまでにある程度出版計画を固めなければならぬ。年明けとなると来年の予算編成から外れてしまう。

事務局（丸井館長）：その辺りも相談の上、決めていきたいと思う。

吉田会長：以上で議事を終了する。

河野部長が今後の事業予定や編纂会議の枠組みについて、次回までに整理して報告する旨を附言し、閉会。

問い合わせ先 千葉市立郷土博物館市史編纂担当

TEL 043-222-8231